

## 幼児の造形活動における素材の役割 —粘土の活動を通しての考察—

小 口 偉

### The Role of the Material in the Infantile Arts Activities —A Study Through the Activities of Clay—

Suguru OGUCHI

保育園、幼稚園、家庭での生活環境で、子どもの成長には、人間間の関わりの他、身の回りの素材をはじめとした物質と関わることも、成長を支え育む大きな要因となる。

園での乳幼児期の造形表現活動は人間の表現、創作行為の始まりの一端であり、集団の中で行われる造形行為と環境の継続的提供は、子どもたちの心身の成長に関わる場所である。保育所指針、幼稚園教育要領にも謳われているが、具体的な素材の使用方法については各園の実情にまかされている。そこで本考察により、素材を用いた造形活動での子どもたちの反応や行為から、活動の本質と成長を促す為の素材の扱いの要点を明らかにしたい。先行研究に端を発した本考察は、幼稚園年少クラスにおいて粘土の活動を行い、実践からの回答を得ることで、園で行われる造形活動のあり方を探る。

キーワード：造形 幼児 粘土 表現 保育

#### 1. はじめに

保育の造形表現活動の現場指導の経験から、少なからずの園や保育者、指導者にとっての造形活動が、「良い出来映えの作品づくり」に導くことにのみに活動の目的が置かれる指導になっている点に問題と課題があると感じている。園での造形活動の目的は「出来映えの良い作品づくり」や完成を目指した作品の制作のみに留まるのではなく、保育所指針、幼稚園教育要領にも謳われているように「生きる力」を育むための造形活動であるべきである。

本考察は、実際の園での造形活動を通して、そのための活動の本質と素材の扱いの要点を探ることから、保育における素材の役割を明らかにしようとする試みである。

#### 2. 先行研究

上記課題への回答を探るべく、「幼児の粘土素材との関わりについての考察」と題し、日本美術教育連合主催 第47回日本美術教育研究発表会において研

究発表を行った。

発表内容は、保育園、幼稚園では園庭、砂場などでの外遊びでは「土や砂」に触れる機会も多く、そのような素材に触れて遊べば、そのうちに穴をあけたり、積み上げたり、固めたりして「土や砂」という素材を変化させ、なにかつくる遊びをするようになる。自然発生的に、偶然目の前にある素材が造形の材料になる瞬間が保育の日常に転がっている。筆者の保育現場での観察や経験から、このような保育者の意図しない造形的遊びにも、子どもたちの創意や工夫があふれているように感じている。このことはまさに「生きる力」を育む造形活動の根本ではないだろうかと日常的に感じていることから、完成を目指すばかりが活動の目的ではなく、活動過程にこそ成長を見込める内容があるのであろうと仮説を立て、東京都北区M幼稚園、年長クラスでの「つなげる」をテーマにした、粘土の活動実践を事例に取り上げた。個人で具体的な目的のある形をつくることを課題とせず、お友だちと、ひも状の粘土をつなげ

て、そのものから喚起されるイメージを周囲のお友だちと共有しながら、そのイメージを形にすることを楽しみ、結果的にクラス全員の粘土がつながるまでの共同的制作過程を追った。

活動中の自然発生的合同制作が共同的制作へ発展するかのような活動の様子であった。結果として、観察の様子から『活動中の子どもたちの様子から、たくさんの気持ちの揺れ動きをみることが出来た。粘土は単に「～（目的の形）をつくる」ための材料であるばかりではなく、与え方次第で、子どもたちの成長を心身共に支え育み充実した園生活を送るための素材になる面を持つことを確信した。作品をつくるためだけが粘土の活動ではないことも確かめられたが、今回の実践より「子どもにとって粘土はつくるためにある」といえるのではないかと考えるに至った。』と結論づけ、保育における幼児期の造形表現活動の持つ意義に迫ろうとした。

年長クラスにおいて共同的活動では他の年次に比べ仲間とのやりとりがスムーズに行える。先行研究の実践活動においても仲間とのやりとりの場面が多くみられ、運動会などの行事や、その他の領域での活動においても、お友だちとの関わりを積極的に促し、一緒に活動することを充分に楽しんで行う活動を積み重ねていて、その人間関係を深める成果もできているように感じられた。

### 3. 先行研究からの仮説

上記実践から、「単なる課題となる形をつくる、または描くだけが造形活動ではなく、複数人での制作過程にみられたような、子どもたち同士の関わりが、成長を促すことを見込む造形活動の一つの要素になるのではないだろうか。」との仮説を立てた。この仮説についての考察のため、先行研究と同一素材を用い、その他の年次での反応の様子を見るための実践を行った。

### 4. M幼稚園での活動

東京都北区、M幼稚園にて園正課の活動で継続的な造形指導の一環の中での実践になる。（筆者が活動指導講師を担当。年間指導計画に従い、打ち合わせの上、クラス担任が活動を進める。）3歳年少クラス

から週1回、年間30回前後の活動がある。正課活動での粘土は年間で2回程度行う。このほか日常的に使用できるものとして個人持ちの油粘土がある。登園から主活動までの時間には園庭や砂場で遊び、担任の裁量により雨上がりの園庭でも遊ぶことが頻繁にあり、素材そのものに触れ遊ぶことに慣れている。

#### (1) M幼稚園の造形活動の流れ

幼稚園教育要領と、これまでの活動の反省等から下記①～③までの造形活動の特徴を洗い出し、年間計画を立てる。身体運動の獲得や、認識する力が活動内容に大きく関わり、それに従い活動を組み立てていくことが、無理なくカリキュラムを進めていくうえで重要なポイントになる。M幼稚園で行う造形活動の年少クラスから年長クラスまでの造形活動のおおまかな特徴と流れについて先に述べておく。

##### ① 年少児（3～4歳児）

何事も初めての幼稚園では、集団生活に慣れていない子どもが多くみられる。「描く、造る」経験にも差がある。入園後一ヶ月～二ヶ月ほどで集団にまとまりが出る。周囲のお友だちと関係をもてるようになり、社会性をみるみる身につける。造形活動では、初めて出会う素材や道具に興味津々の様子が見られる。素材の変化や、素材の表情自体に興味を持つことが多いことから、必ずしも具体的な形を描いたり、つくったりする必要はないと思われる。素材自体に身体ごと親しむことが後々の活動の支えになる。「えのぐ」、「粘土」、「紙」ってどんなものだろう？ どんな遊びができるのだろう？ といった視線から始まり、全身で素材を感じ気持ちを発散しながら遊んだ結果が作品として残ったり、形には全く残らなかったりする。描いたりつくったりしたものの意味づけをするが、大人がみて、それとわかる形にはなっていないことが多い。描いては壊し、壊してはつくることを夢中で繰り返しながら、素材や道具との出会いを楽しませたい。保育園0、1、2歳児クラスの子どもたちにも道具や素材に対しての興味、好奇心があるのはもちろんであるが、3歳児クラスでは、主に言葉と具体的身振りによる視覚的指導で、はさみなど道具の危険を回避しようとさせる指導の徹底ができ、子どもたち自身の自主性、積

極性に任せた活動が始められる。このことによりはじめて集団の中で、道具を「道具」として扱う活動が可能になる。土に触ると手のひらを土の上にのせ、表面を往復しながら触り心地を確かめるほか、指先で線を描く。意識的に土を握って落したり、お団子をつくったり、ままごとに展開して遊ぶ。粘土は経験を重ねると、〈丸める、つぶす、のばす〉行為からできる形（団子状のもの、おせんべい状のもの、ひも状のものなど）を組み合わせ、様々な発語とともに、何かに見立て遊ぶ姿がみられる。

これら特徴から年少時での活動の大きな流れは、

- i. 素材と出会う
- ii. 素材で遊ぶ
- iii. 道具と出会う

以上3点を活動の流れのベースに置き、素材遊びに対し、抵抗なく楽しく遊び親しむことをねらいとしている。

## ② 年中児（4～5 歳児）

体つきも年少組よりも一回り大きくなり、ひと通りの素材、道具と触れ合い、その中で、「こうしてみよう！ ああしてみよう！」と、好奇心に駆られ、試すことの繰り返しの楽しさを見いだす。素材遊びで気持ちを解放するだけではなく、偶然の形に自分のイメージを当てはめ、合体や組み合わせから、自分のイメージや想いを具体化しようとする姿がブロックや、平面構成遊びなどからよくみられる。一つの絵の中にもきちんとストーリーがあること、そのストーリーを言葉で保育者などに伝える様子がみられ、より具体的に目的を持って表現しようとしていることが伺える。また、「ぼくは、これをするから、～君は、あれやって！」「うん、わかった！」といった会話が聞かれ、役割分担を子どもたち同士でおこなうなど、自己と他者の区別がはっきりとしてくる。女の子らしさ、男の子らしさも際立ちはじめ、お友だちとの関わり合いも活発になることから集団での活動も無理なくとりくめる。粘土では平面的に近い扱いから、立てたり、穴をあけるなど立体的に扱おうとする。

これら特徴から年中時での活動の大きな流れは、

- i. 素材で遊ぶ
- ii. 道具と遊ぶ

### iii. 素材と道具で遊ぶ

以上3点を活動の流れのベースに置き、楽しく遊びながら、素材に対しての発見を楽しんだり、色や形で具体的に表現しようとしてみたり、お友だちと活動を通してふれあうことをねらいとしている。

## ③ 年長児（5～6 歳児）

様々な道具、素材を操れるようになり、何が描かれ、造られているのか説明がなくてもわかるように形に表せるようになりはじめる。形や物事の「仕組み、ルール」について関心を持つ子が多くみられる。ルールに従った遊びや、遊びの中でのルールを自分たちで考えること、文字、数字を描いてみることに興味を示す。このようなことから、観察対象の形を、ひとつひとつしっかりと確かめるように迫って描き造ることができ、また、そのようにすることに夢になれる。そこから発想して、そこにはないものまで描き込みながら自分の世界の構築を楽しむ姿もある。友だち同士の役割分担にも幅がでて、複数人でルールを共有した行動ができ、手助けや協力して大掛かりなものも制作できる。

これら特徴から年長時での活動の大きな流れは、

- i. 素材と道具で遊ぶ
- ii. 表現を楽しむ
- iii. 皆ですることを楽しむ

以上3点を活動の流れのベースに置き、様々な素材を材料として、道具を用いながら扱い、「自分なりの表現」を楽しむほか、お友だちの表現に共感し楽しんだり、共につくりあげたり…活動の中で工夫し、考え、深め、自分を思い切り発揮していくことをねらいとしている。

以上の①～③を踏まえ計画を立てている。

先行研究では4.③、iiiに焦点を当て、〈複数人の活動〉での考察となった。今回の考察は、仮説から、やはり複数人での活動から考察をしたいと考えた。4.②においても複数人での活動は無理なく行えるとの予測をつけたが4.①で行った場合の予測が立てにくかったことから、①で考察を試みることにした。

## (2) 活動案

### ① 活動日時および内容

2013年10月3日

午前10時20分～11時40分

「土粘土（テラコッタ）であそぼう」

### ② 対象クラス

年少クラス

出席人数 男女合わせ21名

### ③ 活動設定理由

- i. 素材遊びとして「土粘土」に出会い親しませる
- ii. 複数人での活動がどの程度可能であるかの様子を見る

### ④ 素材設定

共用の土粘土「テラコッタ」を約40kg使用する  
一人に対しおよそ500gの塊にして配布する

粘土ペラなど形をより詳しくつくるための道具は使用しない。（手を動かして粘土に充分にふれてほしいため。）

### ⑤ ねらい

- i. 粘土に手や足で触れることで気持ちを解放する
- ii. 粘土で出来ることを楽しむ

### ⑥ 環境設定、準備

- i. 保育室、床によごれ防止用シート、床で行う
- ii. テラコッタ約40kg（約500g程度で小分けにして配布。  
触ったときにベタベタと手にまとわりつき過ぎず、固すぎない状態にしておく。）

### ⑦ 活動プラン

- i. 10時20分～10時35分／導入
- ii. 10時35分～10時55分／粘土にふれ、それぞれにつくりたいものをつくる。
- iii. 10時55分／保育者がつなげてみることを促す
- iv. 11時／お友だちを意識させる声がけをする。
- v. 11時～11時25分／それぞれに遊ぶ
- vi. 11時25分～／まとめ、後片付け。

## (3) 実際の活動

### ① 導入（クラス担任が行う。）

- i. 粘土の状態の説明（においや冷たい、柔らかいなど。）
- ii. 粘土で出来ることの説明（変形……ちぎる、つまむ、のばす、丸める、つぶす、たたく、おす、おし込む、並べる、積む、積み上げる、立たせる、倒す、崩す、合わせる……といった造形するための行為の要素。）



### ② 実際の活動

導入を受け、気持ちが逸る様子。「つめたい」「くさい」「やわらか〜い」など、粘土の感触や状態の感想を伝える声が多く聞かれる。粘土の塊に触れた後、立ち上がって粘土塊を落として遊ぶ。



何度か、立ち上がった胸の辺りから粘土塊を落とすことを繰り返した。塊が変形することを楽しむほか、頭上から、叩き付けるように床に向け塊を投げつけるように落とす子もみられる。「ドンドン」「ドスンドスン」と言いながら、振動や音についても注意を向けている。

おおよそ、どの子の粘塊も扁平になってきたところで、足で乗ってみることを促す。





おそろおそろではあるが、足からの感触も楽しんでいるようにみられる。粘土塊がさらに扁平になることが楽しいのか、粘土塊の上で「ピョンピョン」との発語とともにジャンプを繰り返す子が多数（同時ではないものの全員がこの行為を行った。）みられる。



「みてー！」「ぺっちゃんこ！」など粘土の状態を説明する発言のほか、「おせんべい」、「ピザ」、「おさら」と平らな形のイメージのものに見立てる子もいる。

最初の粘土が平らになり見立てたり、持ち上げたり、丸めたりする様子が見られるが、これ以上どの

ように遊んでみてよいのか戸惑う子が半数ほどいたため、一旦活動が滞る様子。そこで、あらたに余りの粘土を 300g 程度ずつ渡す。



平らな粘土をお皿に見立て、あらたな粘土では、お団子をつくってのせたり、ピザの具としたものをのせたりする様子が見られるほか、平らな粘土にあらたな粘土をそのままのせ、再びジャンプをして粘土をつぶす様子も見られる。

### ③ 「つなげる」を促す

子どもと共に粘土を平らにしていた保育者が、自分の平らな粘土から、ひも状の粘土で、横にいる子どもの平らな粘土とをつなげた。はじめのうちは周囲の子どもたちはあまりこの行為を肯定的に捉えていなかったようで、「つなげていい?」（担任）、「いやだ」（子ども）、「つなげようよ」（担任）のやり取りがあった。（クラス全員に向け声がけするというよりは、周囲の3名を誘う程度。）



しかしつなげる行為は楽しかったのか、徐々に自分の粘土を周りお友だちの粘土とつなげようとする子どもが増え始めた。



流動的ではあるが、およそ半数がつなげることをし、残りの半数がつなげる以外のこと（おだんごやさんや、おはなやさんをはじめとした、ごっこ遊び、ひも状の粘土の上を車や電車に見立てた粘土で走らせることなど）をしている。）



設定時間の区切りで終了の時間が来たことを伝えるが、なかなか終わることが出来ない。5分ほどすると、「おわりにする」といいながら2名が手洗いに行き、それをみてゾロゾロと半数以上の子どもたちが活動を終えた。最終的に終わったのは、最初の終了の声がけをしてから15分後であった。



## 5. 検証と考察

### ① 土粘土に触れること

土粘土の活動は初めてであるが、園庭や砂場では、よく土に触っている。また、造形の活動でもヌルヌルの状態のえのぐを触り、全身にぬりたくって遊ぶというような、身体全体を使って素材感を感じながら遊ぶ活動を経験している。足で踏むことにも抵抗がないようにみられた。足で踏むことで、「くすぐりたい」「つめたい」といった感覚をより強く感じたようで、興奮が高まっている様子であった。

### ② 見立てと具体化

粘土塊の形が変わるごとに「つぶれたー」「おにぎりみたい」「おせんべい」「ピザ」「おさら」など次々に見立て遊びを楽しむ姿がみられた。偶然それらしい形に見えたところから、次にしようとするのを思いついているようで、「ピザにのっける、やさい」「おさらには、おだんごのせるの」などの発語とともにイメージを具体化しようとする行為がみられた。

#### 1. 具体化に用いている形態

- i. 球体状の形もの
- ii. iをつぶしたコイン状の形もの
- iii. ひも状の形もの
- iv. i～iiiを重ねたり積み上げたり曲げたりした形のもの

それほど複雑な形態をつくるのではなく、単純な形の組み合わせから、それらしい形態をつくろうとしていた。

#### 2. 形をつくるための手の運動（上記5.②、1、i～ivに対応）

- i. 小さな粘土のを手のひらにいれ、両手を合わせ上下左右に円を描くようにこすり合わせる（片手では、床を使い同じ動きで）
- ii. つぶす、たたく
- iii. 両手を合わせ上下のみに動かす
- iv. 粘土をつまみ上げのせる、たたいてくっつけるといったような手の動きから出来る形をつくっている。つくる行為の運動としては比較的単純な運動で、このほかには、おす、突くといったこともしている。

### ③ 「つなげる」 ことについて

保育者がつなげ始めた最初の段階から、あまり乗り気ではない様子であった。しかし保育者が、つながった粘土塊と粘土塊を「おうち」にみたて、間のひも状の粘土を「みち」にみたて、キャラクターに見立てた粘土を歩かせるようなごっこ遊びをはじめたところ数名の「つなげる」行為がはじまった。先行研究での年長児は相談しながら「つなげる」ことをしたが、年少児ではお友だち同士の相談はみられなかった。むしろ「つなげないで!」といったような否定的ともとれる発語も聞かれた。しかし活動自体、子どもたちの興奮している様子、集中している様子から、楽しく活動が出来たものと推察する。いつも仲良しのお友だちと共にごっこ遊びのように楽しむ場面もあった。



### ④ 年長児との違い

今回の活動では、先行研究の年長児と大きく異なる点とは、お友だち同士の相談が圧倒的に少ない感じた点である。中には「ここにつなげていい?」「いいよ」、「てつだってあげようか?」「うん」、などのやり取りはみられたが、相談の上、イメージを共

有しあって、お互いが役割を持って動こうとする姿は見られない。保育者の誘いや、イメージの投げかけに対し、個人的に反応する。年長児はこの時点でもう一段階、仲間と相談をしてから始める様子が見られたことから共同的制作といえ、今回の年少児は共同の作業の様子が見られないことから合同的制作と言える。



(年長児の相談の様子)

### ⑤ 年少児の「つくる」ことについて

自分の範囲の粘土に周囲の子が断りなく粘土をつなげたことに嫌悪の感情を表し、「やめて!」という様子が5回ほど見られた。(同一児ではない) また、つなげることにに関して、自分の粘土塊からスタートさせた「みち」のようなものをつくりはじめたが、他の粘土塊にはつなげず円を描くように、自分の粘土塊に再び戻ってくるといふ子もいた。このような様子から推測すると、年少児においては、意思の疎通についても未発達なところもあるのか、「じゃまされたくない」、「自分のことで夢中になりたい」というような『一人でやってみたい気持ち』が強いのではないだろうか。クラス全体で行っている活動の方向は意識しつつも、その中に埋もれ一人で没頭しているような子が多いと筆者には感じられた。







## 6. 結果

年少児において、

- i. 素材遊びとして「土粘土」に出会い親しませる
- ii. 複数人での活動がどの程度可能であるかの様子を見る

この2点を念頭に置き活動した。

i においては手や足、体全体を動かしての活動ができるよう指導したことと、活動中の子どもたちの表情や声の様子から楽しく活動できたことを確信したことから、子どもたちは土粘土に親しめたように感じる。

ii については、年長児のように相談をして共に何かをつくらうとする姿は見られなかった。普段からよく遊んでいる仲良しの仲間でも2~3名程度のグループに分かれ、ごっこ遊びが始まる場面はあったが、自分でつくったものを持ち寄って遊んでいるように見られ、これからつくらうとするものを相談する場面は筆者の観察する限りでは見られなかった。今回の複数人での活動は5.④より年長児のような「共同的制作」というよりも、「合同的制作」といえる。しかし、遊びの方向としては、つくられたものをつかっ

てごっこ遊びをする、「いれて」「いいよ」などの数名の固まりの中の仲間に入ってやろうとする、または入れてあげようとする、というような複数人の活動ならではといった様子が見られた。

## 7. 結論

先行研究より、「単なる課題となる形をつくる、または描くだけが造形活動ではなく、複数人での制作過程にみられたような、子どもたち同士の関わりが、成長を促すことを見込む造形活動の一つの要素になりえるのではないだろうか。」との仮説を立てた。

観察の様子からすると、年少児においては年長児のような「複数人での制作過程にみられたような子どもたち同士の関わり」は見られない。集団での活動が個人の制作にとってマイナス（邪魔をされているような）の印象を持ってしまったような場面もあった。一人での遊びに没頭する姿が多く見受けられた。

年少児においては5.②から、粘土で具体物をつくることについては、まだ運動面、技術面において無理がある。単純な形態をそれらしく見えるものとして意味づけし、遊びを展開させている。しかし、「おだんご」「おはな」「おさら」などに関してはつくろうとして、つくっている姿も見られる。行為の結果の偶然性と、偶然の遊びの中から思いついたテーマに沿ったものをつくり出そうとする操作性のある遊びが同時に起こっている可能性がある。複数人で行うことから、視覚の情報として多く入ってくる、「行為の結果を表す粘土の形態」を自分なりに「或るイメージ」として捉え、それを踏まえた次の一手を出すことを繰り返すことで、ただの素材に過ぎない粘土を、表現の材料に変換しているようだ。

活動最中、言葉でのやりとりがお友だち同士活発に行われているわけではない（「せんせい、みて～」「ここが〜でね」などと保育者への子どもからの働きかけは常に多くあった。）ことから、「複数人での制作過程にみられたような、子どもたち同士の関わりが、一つの成長を促すことを見込む」とした先行研究の仮説は、年少児においてはあてはまらず、意味のないものではないかと考えた。しかし5.③と⑤から、その場にいるクラスメイトを全く意識していないわけではなく、むしろ、お友だちの行為や表現が常に意識にあり、それにつられイメージを膨らませ



るような子どもも多くいたことから、年少児においては複数人での制作が意味のないものではなく、「表現行為を深めるための一つのきっかけになっていた」といえるのではないかと考えた。つまり、「複数人での制作過程にみられたような、子どもたち同士の関わりが、一つの成長を促すことを見込む」活動を将来的に行うための布石として今回の活動は位置づけることができるのではないだろうか。先行研究における年長児の土粘土は、コミュニケーションをとるための材料となる側面があることに素材の扱いの要点があると指摘したが、今回の年少児においては、おおまかなテーマ（「つなげる」）に沿った活動の中から自分のやってみたいことを見つけ出し、自発的にやろうとし、目に見える形で現実化させようとする子どもたちの様子に、逞しさを感じ、個人の遊びや表現の欲求を満たそうとする、人間の表現活動の根源的部分を、この活動に見たように感じる。

年少児が年長児の活動の要点をなぞることは期待できないことがはっきりわかったが、年少児においても「～（完成形が想定された製作物や形）をつくりましょう」というような活動でなくとも、子どもの力を育む活動に成り得るであろう。

粘土を使用することは指先や手の運動になり、年次が上がり、より細やかなものがつくれるようになり、材料を「操る」技術を身につける。また、一人でつくっていても、出来上がりをお友だちや保育者に見せたり、説明したりするなど他人との関係が生まれるケースがある。一人でも複数人でも、いずれの場合にも粘土は「形を造る材料」であるのと同時に、集中力や創造力などを身につける材料でもあり、粘土をきっかけに子どもたちのコミュニケーションまでも生まれている。幼児期の表現活動では、技術を身につけることだけではなく、活動を通し子どもたちの心や気持ちも育まれることが忘れられてはならず、常に活動は両軸を持って展開され、子どもたちを支え育まなくてはならない。

筆者は自身の作品制作の経験から、素材は表現をするための一つの材料として、扱い方の指定はされず、使用者がその扱い方を決められる幅の広い、奥行きのあるものであると考えているが、今回の実践を通し、子どもの表現の現場においても『素材は「完成形が想定された形をつくるための材料」として用意されるばかりではなく、子どもの成長や表現に寄

り添うような柔軟性を持ったものとして使用されることで子どもの育ちを支えることになる。保育における造形活動での素材の役割はこの点にある』と結論づけたい。

#### 参考文献

- ・福井豊信編「保育者のための計画・実践記録集 造形（1～5才）」、明福寺ルンビニー学園幼稚園・保育園、1998年10月
- ・加藤裕之・鮫島良一・菅原順一共著「造形と子ども 子どもの造形表現ドキュメント」すずき出版、2003年3月
- ・皆本二三江編著「0歳からの表現・造形」文化書房博文社、1991年4月
- ・海野阿育・新関八紘・平山康允・福島豊彦共著「造形と子ども 実践編」すずき出版、1996年4月
- ・花篤實・岡田愨吾編著「造形表現 理論・実践編」三晃書房、1994年3月